西島先生を送るにあたって

猪　木　慶　治（物理学教室）

「西島－ゲルマンの法則」で西島先生のお名前は，学部学生のころから伺っていた。しかし先生にはじめてお目にかかったのは30年前，私が大学院に入りたての頃であった。当時，先生は大阪市立大学から米国のイリノイ大学教授として赴任される直前であった。素粒子論の集中講義を本郷でされ，我々その時大いに感銘を受けたのだった。

その後，先生は昭和41年，古巣の本学理学部物理学教室の教授に就任され，以後一貫して物理学科の教育，研究の中心的指導者として数多くの優秀な卒業生を研究者として世に送り出された。その間，物理学教室主任，理学部長，総長特別補佐などをも務められた。そして本年４月からは東京大学を後にされ，京都大学基礎物理学研究所所長として専念される事となった。先生はこのように学内，学外を問わず全国的視野からの科学行政にも多大の御尽力をなさっている。更にはソ連アカデミー外国人会員，ドイツ自然科学アカデミー・レオポルディナ会員として学術の国際交流にも並々ならぬ努力をなさっている。

先生の御専門は，素粒子論，場の理論であるが理論物理学全般に御造詣が深く，先生独自の深い洞察力で，現象論から純粋理論までの広い分野にわたって活躍してこられた。なかんずく素粒子物理学の分野では指導的役割を果してこられ，ηチャージ（ストレンジネス）の発見，その他，相対論的束縛状態の理論，場の理論の分散式による定式化，くり込み群やゲージ理論の研究など多大の業績をあげられた。その為に日本学士院賞をはじめとして多くの栄誉を受けられたことは皆様よく御存知のことで，今更私が申上げるまでもない。また先生の名講義に基づくFundamental Particles, Fields and Particles をはじめとする数々の名著は，国内外で愛読され幾多の研究者を育てている。

こう書いてくると先生は，こちこちの真面目一筋人間と思われるかも知れないが，先生は趣味の面でも多才である。何年か前，西島先生の名札を見て，私の友人が"あ，大車輪の選手がいる。"と言った。東京高校の時代は，もっとスマートであったか，腕力が抜群だったのであろう。また大阪市立大学時代は一日に４本づつ映画をごらんになったと伺っている。大学へ行かれる前に２本，帰りに他の２本立てをごらんになった由。案外その頃，ストレンジネスを思いつかれたのかも知れないが詳細はチェックしていない。その昔，ゲッチンゲンにいらっしゃった頃は，町に８軒映画館が

あったので，１週間に１本だけは見逃したとも伺った。語学もお得意でフランス語は映画をみて勉強されたと人づてに聞いたことがある。ピサ大学ではイタリヤ語で講義されたが，そのイタリヤ語は中央線の電車の中で勉強されたらしい。またパーティーやコンパでお酒が十分入って興がのってこられるとドイツ語がポンポンとび出し，そのあとドイツ語でリードを歌われる。

先生の御性格には温厚さと厳しさの，一見相反する二つが同居していて，優しいけれどもこわいというのが，われわれの共通の感想ではないかと思う。強い正義感を持たれ，何事にもすじを通すことを重んじられるので，みんなから頼りにされ人々の尊敬をうけてこられた。また，理学部長時代，学生自治会との話合いの際も一切の挑発にのらず，常に冷静に，証明なしの結論だけを述べられるので，自治会にとっては手恐い存在だったと聞いている。時々，おだやかな笑顔でしんらつなことをおっしゃるので西島語録という表現がある程，先生はその独得の考え方と，ひらめきをしばしば示された。また，沢山の温かいWitやひょうきんなユーモアでも楽しませて頂いた。

先生は本学を御退官後は，京都大学基礎物理学研究所長として専念され，全国的な視野にたって理論物理学のこれから進むべき道のかじとりをされる。先生が御健康に注意されて，教育，研究，科学行政において今後もますます御活躍されるようお祈り申し上げます。